

## 幼児期の運動と園での生活・遊び技能の関連 — 4 —

——性差と年齢差の視点から——

### Part 4 The Relationship between Physical Activity in Infancy and Life and Play Skills in Kindergarten from Different Viewpoints Based on Sex and Age

児童学科  
Dept. of Child Studies

岩崎 洋子  
Hiroko Iwasaki

朴 淳香  
Junko Boku\*

**抄 録** 運動能力と幼稚園での生活・遊び技能の関連に関して昨年、相関が認められたことを本紀要で報告した。本年度は被験者を加えて、昨年度の更なる検討を行い、生活・遊び技能の粗大運動が他の生活・遊び技能とどのような関連があるのかを検討した。その結果、男女児ともに運動能力が高い子は生活・遊び技能が高く、従来の結果が支持された。また、男女児ともに粗大運動と社会性、言葉の間に相関が認められた。この結果から、運動能力が円満に発達している幼児は、幼稚園での生活や遊びがスムーズに行われていることが示唆された。

**キーワード**：幼児期、運動、生活・遊び技能

**Abstract** In this paper, we argue that there was a correlation between motor ability and life and play skills in the kindergarten last year. This year, we reexamined this study of last year, examining what relationship existed between rough physical activity in life and play skills and other life and play skills. Infants with fully-developed motor ability had high levels of life and play skills for both boys and girls, so this result supported our traditional methodology. And there was a correlation between rough physical activity and sociality and language. This result suggested that infants with fully-developed motor ability have a tendency to develop their life and play skills conspicuously in the kindergarten.

**Keywords** : infancy, physical activity, life and play skills

#### 1. 目的

40年間にわたり、ほぼ10年毎に継続され実施されている幼児の運動能力テストの全国調査から時代的な推移<sup>1)</sup>を見ると1966年から1973年にかけてはほとんどの種目で向上がみられたが、1973年から、1986年にかけては停滞を示し、1986年から1997年にかけては全種目の低下がみられた。森ら<sup>2)</sup>の行った2008年度の全国の幼児の運動能力テストでは、1997年度に見られた低下傾向は、改善されず低下傾向はほとんど変化していないという報告で

あった。客観的に幼児期の運動発達を推察する指標としての運動能力テストは、一方、その時代の幼児の生活や遊びの質や量を推察する手懸りになるともいえる。運動能力の低下は運動発達の課題として捉えがちなが、幼児期が総合的に発達していく時期であるので、運動経験の不足はむしろ、幼児の生活や遊び技能の低下につながる懸念がある。

筆者らは、運動能力と幼稚園での生活や遊びがどのように関連しているのかを明らかにするために、2007年から同一園の幼児を対象に運動能力と生活・遊び技能の関連を検討してきた。その結果、

\* 鶴見大学短期大学部

全体としての運動能力と生活遊び技能の総合点で相関が認められたが、年齢、男女児ではそれぞれの特徴が見うけられた<sup>3)</sup>。

今年度は被験者をさらに増やし、運動能力と生活・遊び技能の関連を年齢差、性差の視点から検討し、また、生活遊び技能の粗大運動と微細運動、生活習慣技能、社会性、言葉の4項目との関連を検討することを目的とした。

## 2. 研究の方法

対象園：横浜市内の住宅地にある私立幼稚園

対象児：表1に示す。

実施期間：＊運動能力検査は4年間ともに10月～11月

＊生活・遊び技能検査は4年ともに運動能力検査終了後

実施内容：

＊運動能力検査（東京教育大学体育心理研究室作成）25m走、立ち幅跳び、ソフトボール投げ、両足連続飛び越し、体支持持続時間の5種目を筆者らが測定し、5段階評価を用いて評価した。

＊生活遊び技能検査 津守らの発達検査項目、安梅らの発達チェックを参考に、対象園の現在の生活・遊びの実態に即したものを、5つの領域それぞれから5項目、計25項目を作成し、担任が保育を担当してから6ヶ月後に判断した。明らかにできることは○、できないことが多いは△、できないは×とし、○は1点、△と×は0点として処理した。

[粗大運動（動的な活動）]

- 1) リズムよくブランコをこぐ。
- 2) 5～6回以上続けて縄跳びをする。
- 3) 太鼓橋に登って渡ったり、飛行機、登り

棒で上り下りする。

4) 30mぐらいまっすぐ走る。

5) 目的に合うようボールを投げたり、両手で受け止める。

[微細運動（静的な活動）]

6) はさみを使って簡単な形を切る。

7) 想像していろいろなものを描く。

8) ひもや縄を結ぶ。

9) よく飛ぶようにひこうきの折り方や飛ばし方を工夫する。

10) 好きな楽器を操作していろいろな音を出す。

[生活習慣の技能]

11) ソックスを一人で脱いだりはいたりする。

12) はみがき、うがいを自分でできる。

13) 排泄の始末（小便、大便）を一人でする。

14) 汗をかいたら自分で着替え、脱いだものがある程度たたんで決まった場所に置く。

15) ふきんやぞうきんを使って、汚れたところをきれいに拭く

[社会性]

16) 2～5人のグループになり子どもが考えたごっこ遊びをする。

17) 鬼ごっこのルールがわかる。

18) 落ち着いて先生の話が聞ける。

19) 自分からあいさつ（おはよう、さようなら）ができる。

20) 友達と順番に物を使ったり、じゃんけんで解決できる。

[言葉]

21) 自分の名前をひらがなで書く。

22) 幼児語をほとんど使わない。

23) 何時か興味を持ったり、大人にたずねたりする。

24) 遊びに必要な数を数えることができる。

25) なぞなぞやしりとりができる。

表1 対象児

	4歳男児	4歳女児	5歳男児	5歳女児
2007年度	41名	50名	43名	42名
2008年度	50名	51名	46名	51名
2009年度	39名	29名	43名	41名
2010年度	38名	43名	52名	44名
計	168名	173名	184名	178名

## 3. 結果と考察

表2から全体の運動能力と生活・遊び技能の相関を見ると、1%とレベルで相関があり、運動能力の高い子は生活・遊び技能も高い傾向にあることが支持され、昨年度の結果と同じであった。田中<sup>4)</sup>、杉原<sup>5)</sup>の研究においても運動能力が高い子は自主性、社会性、積極性の高い性格特性があることが報告さ

表2 運動能力と生活・遊び技能との相関

学年		運動能力	生活・遊び
全体	運動能力		.205 (**)
	生活・遊び	.205 (**)	
4 歳児	運動能力	男児→	.270 (**)
	生活・遊び	.329 (**)	←女児
5 歳児	運動能力	男児→	.273 (**)
	生活・遊び	.150 (*)	←女児

\*\*p<.01, \*p<.05

れているが、本研究でも、運動能力が高い子は園での生活・遊びの場面でも自分の能力を発揮しやすい状況にあることが推察される。

また、年齢別、性別をみると5歳児女児を除いて4、5歳児男児、4歳児女児は1%レベルで相関が見られた。5歳児の女児に5%レベルの相関であることは、遊びの特性として5歳児になると男児に比べて運動遊びが減少することが要因として考えられるが、本研究では明らかではない。

表3から運動能力と粗大運動、社会性、言葉の関連は1%レベルで相関が見られた。微細運動と生活技能は5%レベルの低い相関であった。

粗大運動と微細運動、生活技能、社会性、言葉は1%レベルの相関があり、また、その他の4項目間でも相関がみられ、生活・遊び技能はそれぞれの項目が独立しているより、総合的に発達していく傾向があるのかもしれない。このことは、運動的な技能を内容とする粗大運動は他の4項目の技能と関連し、総合的に発達していくことを示唆しているといえる。

表4と表5の4、5歳児の性別の表を見ると運動能力と粗大運動の間では男女児ともに相関が認められた。このことは幼児期が運動能力と運動技能の分化がまだであること<sup>6)</sup>を考え合わせると、この関連性が高くあり、また、運動場面で運動を成就するとき運動能力を総合的に使用することが推察される。運動能力と5項目の関連をみると、4歳児より、5歳になると男児が相関が高くなり、女児にはそのような傾向が認められなかった。生活・遊び技能5項目間の相関を見ると。男女児ともに4歳児より5歳児の方が相関が高く、男児にその傾向が認められた。粗大能力との関連を見ると男女児ともに社会性と言葉の間に相関が認められた。このことは5歳児になると運動場面に集団的な内容が多くなり、社会性が運動遊びの中で求められ、また、言葉を介しながら

表3 運動能力と生活・遊び技能5項目との相関（全体）

	運動能力	粗大運動	微細運動	生活技能	社会性	言葉
運動能力		.295 (**)	.085 (*)	.089 (*)	.106 (**)	.109 (**)
粗大運動			.249 (**)	.263 (**)	.258 (**)	.281 (**)
微細運動				.169 (**)	.367 (**)	.521 (**)
生活技能					.390 (**)	.208 (**)
社会性						.399 (**)
言葉						

\*\*p<.01, \*p<.05

表4 運動能力と生活・遊び技能5項目との相関（4歳児 男・女児）

	運動能力	粗大運動	微細運動	生活技能	社会性	言葉
運動能力	男児→	.318 (**)	.181 (*)	.166 (*)	0.106	0.107
粗大運動	.474 (**)	←女児	.198 (*)	.235 (**)	0.136	0.018
微細運動	0.086	.170 (*)		-0.037	.294 (**)	.506 (**)
生活技能	.159 (*)	.164 (*)	0.016		.307 (**)	.183 (*)
社会性	0.149	0.019	.282 (**)	.263 (**)		.380 (**)
言葉	0.093	.157 (*)	.480 (**)	-0.140	.194 (*)	

\*\*p<.01, \*p<.05

表5 運動能力と生活・遊び技能5項目との相関(5歳児 男・女児)

	運動能力	粗大運動	微細運動	生活技能	社会性	言葉
運動能力	男児→	.345 (**)	.149 (*)	0.027	.178 (*)	.232 (**)
粗大運動	.279 (**)	←女児	.222 (**)	0.129	.366 (**)	.431 (**)
微細運動	-0.021	0.114		.196 (**)	.340 (**)	.532 (**)
生活技能	0.100	.179 (*)	.223 (**)		.365 (**)	.301 (**)
社会性	0.065	.275 (**)	.338 (**)	.538 (**)		.506 (**)
言葉	0.043	.232 (**)	.501 (**)	.402 (**)	.422 (**)	

\*\*p&lt;.01, \*p&lt;.05

遊ぶことが技能として求められることが、相互の関連性を高めることにつながっていると推察される。

男女児ともに5歳児の方が運動との関連性が示唆されている。また、男児は粗大運動と微細運動、社会性、言葉に関連性が見られたが女児は微細運動の方が粗大運動より、他の項目との相関が認められている。このことは、5歳児になると男児は粗大運動を用いる遊びの内容が多くなり、女児は微細運動を用いる遊びが多くなる傾向にあることが影響しているのかもしれない。

いずれにしても、粗大運動、微細運動と他の項目の関連が認められるのは、運動を伴う遊びが、子どもの生活・遊び技能を高めていると推察された。

個人の分布を見ると、4、5歳児ともに女児の方が生活・遊び技能の平均値が高く、男児は個人差が大きく、高い群と低い群に分かれる傾向にあった。

#### 4. まとめ

- 1 4、5歳児、男女児ともに運動能力の高い子は生活・遊び技能が高い傾向にあった。
- 2 運動能力と生活・遊び技能の粗大運動、社会性、言葉に相関が認められた。
- 3 4、5歳児、男女児ともに運動能力と粗大運動に相関が認められた。
- 4 5歳児男女児ともに粗大運動と社会性、言葉に相関が認められた。
- 5 生活・遊び技能は4、5歳児ともに平均値は女子の方が高く、男児は個人差が大きい傾向であった。

以上、4年間の測定結果から、運動能力と生活遊び技能の関連を検討した結果、関連性があることが認められた。このことは運動能力は運動発達を支え

るだけでなく、生活や・遊びの発達に関連していると推察された。その特性として4歳児より5歳児、女児より男児にその傾向があった。

本研究の測定の実施に協力してくださった、鶴見大学短期大学部附属三松幼稚園の園児の皆さんと保護者の方、また、本研究を長年理解し協力してくださった黒田園長、原口主任、クラス担任の先生方に心よりお礼申し上げます。

本研究は日本保育学会第64回大会で発表した1部をまとめたものである。

#### 参考文献

- 1) 杉原 隆, 他: 1960年代から2000年代に至る幼児の運動能力発達の辞退的な変化, 体育の科学, **54**, 161-161 (2004)
- 2) 森 司朗, 他: 2008年の全国調査からみた幼児の運動能力, 体育の科学, **60**, 56-66 (2010)
- 3) 岩崎洋子, 朴 淳香: 幼児期の運動と園での生活・遊び技能の関連—3— 女子大紀要(家政), **58**, 11-15 (2011)
- 4) 田中純子, 他: 幼児の運動発達と性格の関連に関して, 日本公衆衛生雑誌, **37**, 341-347 (1990)
- 5) 杉原 隆, 他: 幼児の運動能力と運動指導ならびに性格との関係, 体育の科学, **60**, 341-347 (2010)
- 6) 市村, 他: 小学校3年生と高校1年生(男児)の運動能力因子構造の比較: スポーツ心理学概論, 不昧堂, 東京 (1979)